

授業力向上プロジェクト2017

学力向上委員会

1. はじめに

本校では学力向上委員会を中心に授業研究会や若手教員授業力向上塾など、様々な取り組みを実施し、若手教員のレベルアップを図ってきた（これまでの本校の取組については、福井県立若狭高等学校編『研究雑誌 第44号』「校内研修プロジェクト～授業力向上を目指し、学び続ける教員集団へ～」、『研究雑誌 第45号』「校内研修プロジェクト2014」および『研究雑誌 第46号』「授業力向上プロジェクト2015」、『研究雑誌 第47号』 授業力向上プロジェクト2016」を参照)。特に若手教員授業力向上塾については、若手教員が多いという本校の特徴を活かした実践であるといえる。本稿では、特に授業研究会、若手教員授業力向上塾、世界授業研究学会の実践について述べる。

2. 仮説

全学科において地域資源を活用した探究学習を実践することで全教科に授業改善を波及させ、主体的・対話的で深い学びを実現する学校文化を醸成することができる。

3 仮説検証のための実践

- (1) 校内研修体制の充実・若手授業力向上塾
- (2) 教員指導力向上奨励事業
- (3) 世界授業研究学会

4 実践（1） 校内研修体制の充実、若手授業力向上塾の実施について

- (1) 目的 全教科における授業の改善
- (2) 実施内容

ア 校内研修体制の充実

「SSH・研究部」が授業改善に向けての校内研修の企画立案を担当し、組織的に授業力向上研修を行っている。29年度に行った主な企画は以下のものである。

① 公開研究授業と研究協議会

6月、11月の年2回実施した。授業を参観する観点を「一人ひとりが深く学ぶための授業づくり～深い思考へと誘う問いとは～」と設定した。校外からの参観者は6月の研究会に40名、11月には86名を集めた。教育学研究者や、指導主事、全国で活躍中のエキスパート教員など、多彩な助言者から指導を仰ぎ、授業力向上に向けての検討を行った。招いた助言者は以下の通りである。

6月 公開研究授業 助言者			11月 公開研究授業 助言者		
国語	吉田 繁 山本 泰弘	教育総合研究所教科教育センター所長 高校教育課指導主事	国語	八田 幸恵	大阪教育大学 教育学部 准教授
地理歴史	若松 大輔	京都大学大学院 院生	地理歴史	青木 達一郎	福井県立藤島高校 教諭
数学	河内 一樹	灘中学・高校教諭	数学	岩佐 純巨	鈴鹿中等教育学校 特命講師 授業力向上推進部長
理科	浅原 雅浩	福井大学教育学部教授	理科	山田 吉英	福井大学 教育学部 准教授
英語	中西 健介	灘中学・高校教諭	英語	中井弘一	京都橋大学 国際英語学部 国際英語学科 教授
保健体育	北原 琢也	京都大学大学院教育学研究科 特任教授	保健体育	北原 琢也	京都大学大学院教育学研究科 特任教授
水産	遠藤 貴広	福井大学	水産	遠藤 貴広	福井大学 教育学部 准教授
家庭	遠藤 貴広	福井大学	音楽	吉村 治広	福井大学 教育学部 教授

11月の研究会では、福嶋校長が校外からの参観者に対して本校の研究の概要を説明し、活発な質疑応答が交わされた。(写真左) 研究授業では、各教科とも「深い思考」へと誘う課題や「主体的・協働的な学習活動を展開するなど、工夫が見られた。(写真中央) 研究協議では参観者・本校教職員・助言者が、各教科における『深い思考』とは、どのような思考か」「良い問いとはどのような問いか」などについて意見交換を行うなど、授業力向上に向けた検討が多くなされた。(写真右 水産科の実習助手や船員も含む研究協議の様子)



6月・11月には公開授業週間を設け、全校職員が2週間、保護者にも授業を公開し、研鑽を深めている。また、全教職員が他教科を含む授業を参観し(年5時間程度)、自身の授業力向上に役立てている。

教科授業力向上の観点からは、各教科内の勉強会を充実させるよう、各教科主任と連携し合いながら取組を進めている。理科では、学校設定科目「基礎科学」の項で示したとおり、担当教員7名、実習助手2名が週1回のミーティングを実施したり、ほぼ毎日お互いの授業を参観し合い、指導の改善に努めたりするなどチームとしての取組を実践している。(写真は、物理教材開発に関する協議風景)



数学科では、毎週一人ずつ担当を決めて、その教員が入試問題や授業での取組を教科会で発表するという取組を2008年以来継続して実践している。教員間で情報を交換することにより、教材観や指導観を共有し、授業改善に活かしている。

国語科も、数学科と同じ形式で担当者が新しい教材研究につながる書籍の紹介を行い、新しい教材の開発に向けて研究を深めている。社会科では、毎週一回学校設定科目「社会研究」に関する打ち合わせの中で、フィールドワークの手法や、アンケートの実施方法などについての研修を深めている。これ以外にも、各教科において様々な形で勉強会を実施することで授業力向上に向けて取り組んでいる。

イ 若手授業力向上塾

① 対象者および指導者

採用3年目までの教員および30歳未満の教員を「塾生」、教頭や各部部長、県から認定された授業名人などのエキスパート教員を「師範」とし、教科の枠を超えて「塾生」3名、「師範」1名によって1つのグループを構成する。前期は7チーム、後期は6チームで行った。(下表は前期のチーム分け。最上段が師範)

A	B	C	D	E	F	G	H
上北克也	高鳥通	田辺静也	澤村文明	鋸屋智	中村和浩	堀田浩司	渡邊久暢
橋本洋平	宇多浩美	西川真代	水谷友梨	浜岸くるみ	今井智貴	西川昌美	澀谷順子
松宮大樹	高橋慧	脇本千寛	横田和也	梅田武幸	濱崎駿佑	野坂卓史	熊木祐介
上村幸久	寺島啓介	大部晴也	山下恵理子	斎藤草一	松宮拓也	大橋夕紀	長沢正明

② 実施方法

グループ内で授業の互見を行う。初めに「師範」による授業を「塾生」3人で見学し、事後研究会にて、「師範」の下、各教科に共通する「良い授業のあり方」を追求する。以後「塾生」が順に公開授業を行い、事後研究会の機会を持つ。若手教員がベテラン教員のノウハウを学ぶだけでなく、ベテラン教員も若手からICTの取扱やアクティブ・ラーニングの視点などを学べ、きわめて有効な取組であると好評を得ている。写真左は、音楽の授業をグループで参観した際のものである。新採用の社会科教員が、若手の音楽教員の指導者に従って生徒とともに実際に琴を演奏し（写真中）授業を体感した上で、事後研究会に臨む。事後研究会は、お菓子をつまみながらリラックスした雰囲気で行うことにより、研修への意欲が高まっていく。（写真右）



（3）検証と課題

ア 検証

「自分が指導する教科について客観視できるようになった」、「発問の仕方、机間巡視の仕方が勉強になった」、「生徒の目線で授業を見ることができた」などの成果があった。また事後研究会にて、見学した授業を基に議論できたことは授業観を深める良い機会となった。人数が4人であったため、時間割変更がしやすく半年で2巡するグループもあった。

イ 課題

課題としては、事後研究会が実施される放課後は、個人面談や会議など多忙な教員が多く、全員揃って始められないというケースも多くあった。また前期と後期でグループのメンバーが重なることもあり、もっと多くの教員の授業を見学し、意見交換したいという声があった。

5 実践（2）教員指導力向上奨励事業の実施

（1）目的 教員の自主的な研究活動を促進し、授業改善の一助とする。

（2）実施内容

本授業は、初等中等教育に携わる教職員の自発的な授業実践活動を支援することにより、教職員の授業実践等の意欲の高揚を図るとともに、成果を普及することで本県教職員全体の指導力向上、本県教育の振興に資することを目的として、県教委が募集した事業である。SSH・研究部が応募希望の教員に対する支援を行うことで、自発的な事業実践が促進されている。本年度は意欲ある教員による5チームが、応募・採択された（理科2、情報科1、探究科目1、英語1）、外部資金を獲得し教科教育に関する研究をチームで深めることが、各教科の授業力向上に大きく寄与した。

教科	研究課題
探究	高等学校における地域資源を活かしたPBLカリキュラムの開発
英語	英語科における深い思考とは ～培いたい資質・能力との関連を問う～
理科	物理のイメージを深める単元の開発と評価 ～アクティブラーニングの視点と力学概念調査の結果を踏まえて～
情報	新科目「社会と情報」におけるプログラミング教育への取り組み ～学習指導要領の改訂に向けて～
理科	生徒の主体的な学びと思考力を育成するための授業開発 ～科学における基礎的な実験を通して～

福井県嶺南教育事務所にて行われた研究発表会では、上記5チーム全てが研究発表を行った。

SSH指定校教員としての研究意欲と、研究レベルの高さを県内外の教員に示すことが出来た。(右は研究発表会のポスター。本校研究チームが発表ポスターの1/4を占めている)



(3) 検証と課題

ア 検証

若手教員の主体的な授業力向上に向けた研究意識が向上した。「授業に使う鉄球を購入することで、液状化現象について分かりやすく授業をすることができた」、「物理学会に参加することで最新の情報を入手することができた。SSHの研究テーマについても議論できた」、「授業にもものを持ち込むことが可能になり、物理を身近に感じさせることができた」、「先進校視察、ディベート全国大会視察を行い、英語で学ぶ授業について知見を深めることができた」などの成果があった。

イ 課題

研究発表会への参加、レポートの提出等、負担の多さから事業への応募を迷う教員も多い。なるべく負担を減らせるよう、SSH・研究部にて支援体制を整えることにより、より多くの応募を促したい。

6 実践(3) 世界授業研究学会

(1) 目的

世界各国の研究者から本校の授業研究に対する評価を受けることを通して、教員一人ひとりの授業力の向上につながる研究・研修へと進化を加速させる。

(2) 実施内容

WALS (The World Association of Lesson Studies) は、より良い「授業研究」のあり方を追究することを目的とした学会である。本年度日本で行われた2017WALSでは、各国の研究者や教員が日本の授業研究を学ぶ機会として「学校訪問」が設定された。先進的な授業研究を行っている学校として本校が選定され、全学会長のChristine Lee氏をはじめ、国外から42名の参加者を得た。



世界授業研究学会（WALS）2017 福井プログラム若狭高等学校 開催要項

- 1 日 時 平成29年11月27日（月） 11:00 ～ 16:15
- 2 日程
 - 11:00 若狭高等学校 着
 - 11:10 ～ 11:30 学校長による若狭高校の概要についての説明（視聴覚室）
 - 11:35 ～ 12:25 4限目 授業参観（すべての授業を公開し、来校者は自由に参観する）
 - 12:30 ～ 13:00 昼食（本校生徒と交流しながら食事を行う）
 - 13:15 ～ 14:05 5限目 3年国際探究科における研究授業の参観
 - 14:15 ～ 15:05 6限目 本校の若手授業力向上塾の取組の参観（研究協議の参観）
 - 15:15 ～ 16:15 7限目 若狭高校教員とWALS訪問者との研究協議



（3）検証と課題

ア 検証

訪問者は、授業後に生徒にインタビューを行ったり、本校教員同士の議論を傾聴したりした上で、本校の「若手授業力向上塾」の取組に対して様々な観点から評価を行った。

- ・専門と異なる教科を参観し、小グループで授業の目標設定、活動の組織法、評価のあり方等についての自由な対話を行うことにより、教科の枠を越えた授業力向上に関する知見を得られている。
 - ・メンターとなる教員が、議論をリードしつつ授業の技を継承しようとしている。
 - ・定期的に継続して行うことにより、授業研究が日常化している。
- などの高い評価を得た。

イ 課題

- ・実際の学力の向上にどの程度寄与しているのかについて、効果の検証方法の精度を高める
- ・若手授業力向上塾に参加していない教員の授業力向上に向けた取組をどう進めるかという課題の指摘を受けた。改善の指針としたい。

7 検証のまとめ

全学科において地域資源を活用した探究学習を実践する際には、担当教員同士の綿密な打ち合わせが必要となる。毎週の打ち合わせ等を通して、異なる教科の教員と協働的に進めていく機会が増えることにより、教科を越えて授業について語り合うことが日常化しつつある。それゆえ、公開授業週間や若手授業力向上塾の取組などを通して、異なる教科の授業を参観し共に考察することも活性化している。特に若手授業力向上塾では、ベテラン教員がメンターとなり、若手教員がそれに導かれ研究を深める、と

いうシステムがしっかりと軌道に乗ってきている。他教員の授業を批判するのではなく、自分の授業にどう生かすかを考え、前向きに議論する雰囲気が最大の強みである。今年には世界授業研究学会もあり、海外から視察に来た教員と議論する機会にも恵まれた。

各教科の授業改善も進んでいる。教科会等での授業に対する意見交換が活発になるとともに、校外の研究者や実践家を多数招き知見を得る機会を多く取り入れることにより、学習課題や発問の吟味が各教科の中で検討されるようになった。福井県が募集した教員指導力向上事業には、SSHに深く関係する科目を研究したいという意欲ある教員による5チームが、応募・採択された（理科2，情報科1，探究科目1，英語1），外部資金を獲得し、主体的に視察を行ったり，授業に必要な物品を購入し独自の教材を開発したりすることを各チームが行った。教科教育に関する研究をチームで深めることが，各教科の授業力向上に大きく寄与した。

8 今後の課題

授業改善に関する意見交換の多くは，放課後等の時間外に行われる。各種会議の精選等も含めて，教員の過剰な負担を軽減することも考える必要がある。若手授業力向上塾の取組は，一定の成果を得だしていることから，若手とベテランに加えて中堅教員の参画も図ることで，さらに授業改善を進めていきたい。